

## 4 千葉県学校人権教育研究協議会の活動

千葉県学校人権教育推進校協議会では、県内の市町村教育委員会の人権教育担当者等を対象とした「全体協議会」をはじめ、小学校10校、中学校10校、高等学校5校で組織される「推進校協議会」等、各種協議会を開催していますが、ここでは、平成22年度の推進校協議会にて行われた講演の概要を紹介いたします。

### (1)外国人(日本語を母語としない)児童・生徒への支援について



平成22年8月10日講演概要

林 知音(トモネ)さん 台湾 出身  
高橋 杏奈(アンナ)さん フィリピン 出身

8月の協議会では、財団法人ちば国際コンベンションビューロー(JICAちば)の「ちば出前講座」を活用して、日本語を母語としない児童・生徒への支援を当事者の立場からお話をさせていただきました。

(←写真向かって左が林さん、右が高橋さん)

#### ①林 知音さんのお話

- ・1979年来日。同じ台湾出身の配偶者とともに歯科医として働く。  
千葉県に住んで20年になる。お子さんは、日本で生まれた。
- ・子どものアイデンティティを持たせることが大切。そのために、母国語を家で話させること、自分の国を周りの児童生徒に紹介させることも必要かと考えている。
- ・子どもはすぐ日本に順応するが、大人は言葉等をなかなか覚えられない。親とのコミュニケーションは母国語でした方が、アイデンティティの確立や、親とのコミュニケーション不足で子どもが親を尊敬しなくなったりすることがなくなる。
- ・外国人であるということで、電車の中で、台湾語で話すと白い目で見られた。
- ・子どもの下宿先を決めるとき、不動産業者が必ず借りと契約するのを数日後に約束したのに、外国人であるということで、後から来た高学歴の日本人と勝手に契約してしまった。
- ・日本の文化は漢字なので、漢字にふれさせることが、言葉の意味など理解するのに重要。

#### ②高橋 杏奈さんのお話

- ・20年前フィリピンから来て、2人の子どもがいる。日本で暮らす中でカルチャーショックやホームシックになりながら、子どもを育てなければならない大変さを日々感じている。
- 〈日本の学校〉
- ・フィリピンの公立校では、教師一人に対し70人～80人くらいなのに対して、日本では一人の教師に対して子どもの数がせいぜい40人くらい。
- ・校長先生や教頭先生もいろいろ話を聞いてくれたり、学校が一人ひとりを大切にしてくれていると感じる。
- ・またいろいろな活動が多いところがよい。
- 〈日本の学校にお願いしたいこと〉
- ・家の中でも日本語で話して欲しいという学校もあるけれど、その子には母語があるので、あまり強く日本語だけで話さないとは言わないでほしい。母語でコミュニケーションがとれることもある。2つの言葉を大事にできると考えが広がるし、胸を張れる。
- ・小学校のときに日本に来た子より、中学生になってから来た子のほうがデリケートになっている。勉強したいという子に、図などでも良いので、空いている時間を使って勉強のサポートをお願いしたい。

## (2)子どもの「性」と「生」を考える

平成22年10月22日講演概要

習志野市立習志野高等学校養護教諭 高橋 かん奈さん

### 1 子どもたちの性の現状(総論)

- ・つきあう=sex(性交渉)と考える子が多い。
- ・性交渉に伴うリスクを知らないため、「自分がHIVに感染するわけない」とも思っている。
- ・性教育は、保護者が自分の子にするのは抵抗がある。学校ですべきと考える傾向がある。

#### 「妊娠」に伴い考えられる壁

- ・学校生活が円滑に送れず、進級や卒業が困難になる。
- ・将来の「夢(進学や就職など)」の達成が難しくなる。
- ・出産することはできても「親」になるのは難しい。
- ・中絶には(将来の出産などに)危険が伴う。
- ・男性より女性の方が不利益を受けるケースが多い。

「性」を考えることは、正に一人の人間としての「生」を考えることにつながり、自分のことだけでなく相手のことを考えることになる。



### 2 性感染症

- ・10代でも感染症に罹患している子が多い。
- ・HPVは子宮頸癌を発症する原因の一つであるが、小学5年生ぐらいからワクチン接種をすることで予防ができる(約70%)。
- ・女性の方が性感染症にかかりやすく、症状がなかなか出にくい。自分の命を失うリスクがある場合もあり、赤ちゃんにも影響を及ぼす場合もある。

### 3 望まない妊娠

- ・思春期、性周期は不安定であり、安全日というものはない。
- ・中絶は21週と6日までしか法的に許可されていない。悩んでいる間に赤ちゃんを出産するしかなくなってしまいうケースもある。
- ・性暴力等妊娠を望んでいないのに避妊せず性交渉をした場合、緊急避妊という手段があり、性交渉後72時間以内に専門薬を服用することで防ぐこともできる。
- ・妊娠の期間が40週あるのは親になるための覚悟(心の準備)を持つためのものである。その覚悟がないと、虐待などにつながる。
- ・女性には、たとえ好きな相手であっても性交渉は「NO」という勇気が必要である。

### 4 性被害

- ・一人の愚行が、一人の人生を狂わせてしまう。
- ・その場だけの出来事ではなく、後々まで響く(被害者は自分のことを責める傾向があり、自己肯定感が低下し、不登校等につながることも少なくない)。

### 5 デートDV

- ・親密な関係にある間で暴力行為が行われている。
- ・「何が暴力か」お互いにわかっていない場合が多いので、DVの意味を認識する必要がある。

### 6 さまざまな「性」…性同一性障害、ヘテロセクシャルとセクシャルマイノリティ…

- ・生まれ持っているものであり、多様な価値観や志向があることを知ってほしい。
- ・自分の性的志向を自然に語ることができ、他の価値観を持つ者もそれを尊重できる環境を作ることが大切である。

### 7 子どもたちの心身の健康を守るために…

- ・自己肯定感を高める教育。
- ・うわべだけの規制を伝えるだけでなく、自分で考え行動できるようにすることが大切である。
- ・性教育については、その実施に疑問の声が出されたりもするが、保護者等からの様々な声を聴き取りながら理解を得るような方向にもっていくべきである。
- ・家庭で教えることは難しい場合が多く、学校で計画的に取り組むことが大切。
- ・命の大切さと絡めて、小さいうちから指導すべきである。真剣に伝えれば伝えるほど、子どもはわかってくれる。

### 8 自己肯定感とコミュニケーション能力

- ・自分は価値のない存在であると考える子ほど、親との関係が希薄な子が多い。
- ・相手との関係を大事にしながら、コミュニケーション能力を育てることが大事。
- ・自分はかけがえのない存在であるから、自分の体を大切にするなど、自己肯定感を持てるように普段から家庭と学校が協力して子どもと向き合い育ちを支えていくことが大切と考える。

### 9 キーワードは性と生

- ・「生」に、「心」が加わって「性」となる。
- ・伝える側が覚悟や価値観を持っていると、性のことを話すのに抵抗がなくなる。

### (3)「虐待の傷は癒えるのか」—情緒障害児短期治療施設への取材を通して—

平成23年1月11日講演概要

NHK第1制作センター 青少年・教育番組部ディレクター 杉浦 大悟さん

#### ①なぜ児童虐待をテーマとして取り上げたのか？

・虐待を受けた子どもたちがどのように立ち直っていくのか、親にどのような気持ちを抱いているのか、虐待による心の傷とはどのようなものかなどを、子どもの目線から虐待の問題を考える番組を作れないかと思った。

#### ②ロケの舞台がなぜ長崎県にある情緒障害児短期治療施設になったのか？

・取材をできる子どもは、児童精神科のある病院もしくは情緒障害児短期治療施設(「情短」)しかない。その中で、「椿の森学園」が、3つの条件「(Ⅰ)治療の妨げになる場合は撮影をやめること。(Ⅱ)取材をするロケルールも虐待について勉強をして撮影に入ること。(Ⅲ)児童相談所と親の許可をとること。」を条件に受けてくれた。(Ⅰ)と(Ⅱ)は問題がなかったが、(Ⅲ)を乗り越えるには時間がかかった。



#### ③取材や撮影を通じて、虐待された子どもや親への見方が変わったか？

○虐待を受けた子どもの見方

・愛着を結ばなかった子どもは、人間関係というのは力の強い奴が弱い奴を従える(家庭における強者の親が、弱者である子ども)というパワーゲームみたいなものを信念として、困ったことに直面したら力づくでそれを解決するというやり方になることが多いことに直面した。

・私たちの心は「思考」「感情」「感覚」という大きな3本の柱で支えられている。虐待という関係に陥ると、子どもが殴られる理由を考えても、そんなこと全くお構いなくやられ続け、感情で受け止めたり、痛みにも敏感なまましていると本当につらい。そうすると無意識のうちに3本の柱の間を切ってバラバラになり心の状態もすごく不安定になることを目のあたりにした。

○親の見方

・虐待には2つのパターンがあると感じる。厳しい状況下で親が精神的に追い詰められた“悪意のない虐待”と、自分のストレスや怒りなどを子どもにぶつけることで発散したり、欲求を満たす為に子どもを殴ったり性的な虐待をする“悪意のある虐待”。“悪意のある虐待”をする親はどんなに語りかけても変化することはないといわれている。

#### ④施設における日常の教育活動

・小中学生は施設にある教室で勉強してる。地元の学校の特別支援教室という扱いである。小中学校では各2人の先生が担任としてクラスを見て、中学校では教科によって他の先生も来ていた。しかし、机に座ること、隣の児童の邪魔をしないことなど当たり前のことを毎時間のようには伝えなければならない。

#### ⑤取材中に感じた、虐待と発達障害の深い関係

・ADHDやアスペルガー症候群といった発達障害の子どもたちの被虐待率は一般の子どもよりも高いということ。聞きわけのない、育てづらい子どもに対してきつく当たってしまう親。そして保育園や幼稚園、小学校でも発達障害だから育てるのが大変だよねと、つい行き過ぎたしつけを見過ごしてしまう。安易に発達障害とレッテルを貼って片付けてしまうのもおかしい。

#### ⑥虐待としつけはどこが違うか？

・「虐待としつけの境界線」は、親からされていることを子どもが理解しているかどうかということ。親からのメッセージがこめられており、子どもがその思いを汲み取ることができれば虐待とは呼ばなくてもいい場合もあるのではないかな。

#### ⑦取材を通して私が感じたこと

・情短で虐待を受けた子どもたちと接して、ゆっくりだが、確実に変化していく。情短を出て終わりではなく、むしろそこからが始まりである。

・アメリカでは虐待をくぐり抜けて成長した人をサバイバー(生存者)と呼んでいる。日本でサバイバーが今どれだけいるか見当つかない。虐待を受けている子どもたちだけでなく、サバイバーも苦しむことなく暮らせる社会をどうしたらつくれるかを考えていかななくてはならない。

・子どもの問題はそのまま日本の未来につながる。社会的弱者である子どもの気持ちによりそった番組づくりを続けていきたい。そうした情報があったら教えていただき、どんなことでもお話を伺いたい。

(会場からの質問に答えて)

「確かに取材後も子どもたちとの関係をそれまでと同じ頻度で繋ぐのは困難ですが、『君のことを心配している大人がここにもいるよ』というメッセージは子どもたちに届いているのではないかと感じています。子どもは大人が真剣に向き合えば少しずつでも変わっていくことを学園の職員と子どもたちの間に確かに見ました。」